

日英表現の比較

— 発想の視点から —

笹井常三

はじめに

ちょっとまとまった英文を読むと、たとえ文法上のミスがなくても、日本人が書いたものか、英語を母語とする人が書いたものか、だいたい見当がつく。もちろん使用されている語彙や微妙な慣用表現などの違いもあるが、それよりもずっと重要なことは発想の違いによる文の基本構造にその原因があるようである。

インド・ヨーロッパ語族の言語に共通するのであろうが、英語でも自分と自分以外の人間、あるいは周囲の物との関係はきわめてシャープに区別する。その関係が相互依存であれ、対立であれ、「自分」と「他人、他の物」との関係をはっきりさせなければ気が済まない。そして、このような関係ではつねに「自分」が中心というのが発想の基本構造といえる。「自分」が中心でない場合はそれに代わる人や物、あるいは無生物までが中心となる。この中心が文の主語であり、これがなければ文そのものが成り立たない。もちろん、このような文の構造の背後にはその言語を使う人々の思考パターンと価値観があるのは当然であろう。

英語を母語とする人が日本人よりもはっきりと自分の意見を述べ、自己主張することはすでに多くの人が指摘しているが、その背景には「自分」を中心において他人や周囲の環境との関係を明確にしたいという本能を挙げることができよう。対照的に日本人は他人との関係でできるだけ対立を避け、自己主張を遠慮し、あるいはぼかしてなんとなく調和を保つことを重視する価値観をもつ。可能な限り自分を表に出さないということが、日本語で一人称主語を必要最小限しか使わないことに反映されている。このような違いが日本人と異文化の中で育った人とのコミュニケーションの妨げになったり、ときには誤解を招くことが指摘されているが、これを取り上げることは本稿の目的ではない。

英訳・和訳の実例

まず最初に、日本語と英語の表現の違いを原文と達意の翻訳の実例から眺めてみよう。

夏目漱石：『坊っちゃん』 *Botchan* [訳：Alan Turney]

(1) 「何だか訳が分からない。」 I couldn't make out what it all meant.

(2) 「何だか足の裏がむずむずする。」 It gave me a kind of tingling sensation down my spine.

川端康成：『伊豆の踊子』 *The Izu Dancer* [訳：Edward Seidensticker]

(3) 「わけもなく涙がぼたぼた落ちた。」

For no very good reason I found myself weeping.

(4) 「私の言葉が終わらない先き終わらない先きに、何度となくこくりこくりうなずいて見せるだけだった。」

Now and then she would nod a quick little nod, always before I had finished speaking.

竹山道雄：『ビルマの豎琴』 (*Harp of Burma*) [訳：Howard Hibbett]

(5) 「そして、ときどき思わず扉の方を見たりしました。」

We often found ourselves looking toward the gate.

(6) 「収容所のまわりには竹の柵がゆってあります。それから外へ出ることもできず、外の人が入ってくることもできません。」

The house was enclosed by a bamboo stockade, which not only kept us in but kept others out.

芥川龍之介：『トロッコ』 *The Wagon* [訳：Dorothy Britton]

(7) 「その路をやっと登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広々と薄ら寒い海が開けた。」

When they finally reached the top, they found themselves on a high cliff, beyond which lay a bleak expanse of ocean.

(8) 「時々涙がこみ上げてくると、自然に顔が歪んで来る。それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。」

Every now and then tears welled up in his eyes. He fought them back, but could not stop his nose from making a sniveling sound.

わずか8例であるが、日本文と英文の発想・構造の違いは一目瞭然である。日本文では省略され、あるいは隠れている主語は英文では明示されている（主語がなければ英文は成り立たない）。それよりもわれわれの目を惹くのは、S(主語) + Vt(他動詞) + O(目的語) (第3文型)、SVOO (第4文型)、およびSVOC (C= 補語) (第4文型)の多用である。例えば、(3)の「涙がぼたぼた落ちた」はTears streamed down my face. と訳すほうが原文に近い第2文型(S + Vi.[=自動詞])であるばかりでなく、英語としてまともな表現である。しかし、これが単にこの翻訳者だけの好みでないことは(5)のWe often found ourselves looking toward the sea. さらに(7)のthey found themselves on a high cliffから明かである。すなわち、英語を母語とする人には第3、第4、第5文型が単に文章の表現形式として必要であるばかりでなく、この文型が彼らに落ち着き、安心感といったものを与え

るのであろう。

今度は、英文とその見事な和文訳を比較して発想・構造の違いを見よう。

Ernest Hemingway: *The Old Man and the Sea* (『老人と海』 訳：福田恒存)

(9) He had a bottle of water in the bow of the skiff and that was all he needed for the day.

小舟のへさきに水を詰めた瓶がある。それだけあれば一日はじゅうぶんもつ。

(10) There were other boats from the other beaches going out to sea and the old man heard the dip and push of their oars even though he could not see them now the moon was below the hills.

ほかにも何隻かのボートが海にむかって乗りだしていく。月はもうすっかり山のかなたに沈んでしまったので、舟の形を見ることはできないが、オールを捌く水音が老人の耳にはっきりきこえてくる。

Somerset Maugham: *Rain* (『雨』 訳：中野好夫)

(11) You know Mr Davidson very little if you think the fear of personal danger can stop him in the performance of his duty, ' said his wife.

「皆さん主人をよく御存じないからでございますわ。一旦義務だと思いこんだが最後、そりゃ一身上の危険なんぞで思い止まるような人じゃございませんの。」と細君は云った。

(12) "Why couldn't he mind his own business?" said Dr Macphail.

「他人のことなんぞ、どうだって放っときゃいいんだがね。」マクフェイル博士は云った。

英文の第3文型はあとかたもなく解体され、見事な日本語になっている。(9) He had a bottle of water in the bow of the skiff (小舟の舳先に水を詰めた瓶がある)を含め、(10) the old man heard the dip and push of their oars (オールを捌く水音が老人の耳にはっきり聞こえてくる)、(11) the fear of personal danger can stop him in the performance of his duty、(一身上の危険なんぞで思い止まるような人じゃございませんの)、(12) "Why couldn't he mind his own business?" (「他人のことなんぞ、どうだって放っときゃいいんだがね」)のいずれも訳文では他動詞的要素はまったく姿を消している。そこには直訳調を離れた、われわれが読んでいて落ち着き、安心できる美しい日本語がある。

「静」から「動」へ

上の例からわかるように、日本語の動詞の一つの特徴が「状態」であるのに対し、英語では「動作」が基本である、といえる。日本語が static(静的)で "be-language"、英語が dynamic

(動的)で "do-language" といわれる所以である。したがって、日本人が英語を書くとき、このことを念頭において、可能な限り第3文型とその延長線上にある第4、第5文型にすることが「英語らしい英語」を書く近道と言えよう。いくつか実例を挙げる。2つの英文が示されている例では、(a)は直訳に近く、静的であり、(b)は第3～5文型のいずれかで、動的である。

(13) 「彼には妹が2人いる。」

He has two younger sisters. [第3文型] (以下「文型」は省略)

日本文、英文ともに両言語に典型的な文構造である。日本文は「妹がいる」という「状態」を示し、英文では「妹をもつ」という「動作」動詞を用いている。日本語と英語の違いの原点ともいえる。

(14) 「昨夜トルコでマグニチュード 7.3 の強い地震があった。この地震で 50 人以上が死亡、数百人がけがをした。」

(a) Last night there was a powerful earthquake of magnitude 7.3 in Turkey. More than 50 people died and several hundred were injured.

(b) A powerful earthquake of magnitude 7.3 struck/hit/rocked/jolted/shook Turkey last night, killing more than 50 people and injuring several hundred others. [第3]

「地震があった」「火事があった」などは日本語としては極めて自然な表現である。が、これを「テーブルの上にリンゴがあった」(There was an apple on the table.)と同様に静止した「存在」としてとらえ、There was an earthquake in Turkey. とするのは文としても、またインパクトの点でも弱い。(b)のように「地震がトルコを襲い、50人以上の命を奪った」という第3文型がはるかにインパクトが強く、一般的に用いられる。

また、日本語では「～で」「～のため」のような理由を表す副詞句を文頭に出すことが多いが、英文ではこれらを(無生物を含めて)主語にするのが普通である。

(15) 「台風の影響で甲子園の高校野球の決勝戦が中止になった。」

(a) The finals of the national high school baseball championships at Koshien Stadium were cancelled because of the typhoon.

(b) The typhoon forced the cancellation of the finals of the national high school baseball at Koshien Stadium. [第3]

(16) 「語学では女子学生の方が男子より成績がよい。」

(a) Female students do better in language studies than males.

(b) Female students outperform males (or their male counterparts) in language studies.

[第3]

接頭辞 out- は自動詞を他動詞化して比較されるものを「凌駕する」意味に転化し、第3文型をつくるのに広く用いられる。

(17) 「キリスト教は 1549 年に日本に伝来した。」

(a) Christianity was introduced into Japan in 1549.

(b) Christianity found its way to Japan in 1549. [第 3]

(b) の "found its way" は数多くのバリエーションがあり、ダイナミックな構文のひとつである。(18) がバリエーションの 1 例である。

(18) 「彼女は人混みの中をすすんでいった。」

She made/forced/pushed/struggled/elbowed/muscled/picked/weaved her way through the crowd.

(19) 「親に説得されて彼女は彼と結婚した。」

Her parents talked/reasoned her into marrying him. [第 3]

説得の結果、ある行動をさせる場合には into ~、断念させる場合は out of ~ (Her parents talked her out of marrying him.) を用いて行動と結果を簡潔に表現できる。この文型をとる動詞は「説得」だけでなく、「強制・圧力 (bully, coerce, pressure, etc.)」、「誘惑・おだて」(cajole, lure, seduce, et.)、「欺き」(cheat, mislead, trick, etc.) など多義にわたる。

(20) 「ハーンは 1890 年松江にいた。」

The year 1890 found Lafcadio Hearn in Matsue.

無生物を主語とした第 3 文型で、日本語の発想にはない。つぎも同様である。

(21) 「台風の爪痕を伝える生々しい映像が毎日送られてくる。」

Every day brings fresh images of the havoc caused by the typhoon.

(22) 「火災報知器が鳴って人々は着の身着のままに戸外に飛び出した。」

(a) When a fire alarm went off, people dashed outdoors with only the clothes on their backs.

(b) A fire alarm sent people dashing outdoors with only the clothes on their backs. [第 3]
send (人、物) + ~ing も広範に使われるダイナミックな表現である。

(23) 「息子は働きすぎて病気になった。」

(a) My son became sick from overwork.

(b) Overwork cost my son his health. [第 4]

2 つの目的語をとる動詞 give, lend, send などは日本人にもなじみがあるが、同じ機能をもつ動詞は cost を含めかなりの数にのぼる。以下 (24 ~ 27) はその例。なお、後述の「二重目的をとる動詞の活用」を参照。

(24) 「近所の火事で昨夜は寝られなかった。」

(a) I couldn't sleep last night because of a fire in the neighborhood.

(b) A fire in the neighborhood cost me sleep last night. [第 4]

(25) 「飲み物を用意しよう。」

I'll fix you a drink.

(26) 「彼女はわたしに笑顔をみせた。」

She flashed me a smile. [第4]

(27) 「くだらぬ話はんべんしてくれ。」

Will you spare me your nonsense?

(28) 「気がいたら公園のベンチに座っていた。」

I found myself seated on a bench in the park. [第5]

すでに(3)、(5)でみたように、(27)の I found myself ～は日本語の発想とはかけはなれた表現であるが、英語ではごく普通に用いられる文型であり、日本人ももっと利用すべきであろう。

副詞的語句を主語に

日本語と比べて英語が動的であることは上に挙げたいいくつかの例からも明らかであるが、ここでは日本人が英文を書くときに動的な文型を組み立てるために意識的に試みてよい点をいくつか指摘してみよう。まず「～で」「～のために」「～すると」などを主語にすることから始めよう。

(14)、(15)の例が示すように、日本語の「～で」「～のために」「～すると」など理由、条件、結果、仮定など示す副詞的語句を主語にしてみると、英文が書きやすくなるばかりでなく、「動的」な英文をつくるのに役立つ。

(29) 「親譲りの無鉄砲で無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」(夏目漱石：『坊っちゃん』 *Botchan* 訳：Alan Turney)

Ever since I was a child, my inherent recklessness has brought me nothing but trouble. [第4]

(30) 「日照りが続いたために野菜の値段が高騰している。」

A prolonged spell of dry weather has sent vegetable prices soaring.

(31) 「10分歩くと湖畔に出た。」

A 10-minute walk brought me to the shore of the lake.

(32) 「円安になると日本の製品は海外市場で競争力が強くなる。」

A cheaper yen will make Japanese products more competitive on world markets.

(33) 「円安で輸入品の値段が上がってきた。」

The cheaper yen has made imports more expensive.

(32)と(33)は冠詞の用法からも興味ある例文である。(32)の不定冠詞 a は「円安」がまだ現実のものでないことを示唆しており、(33)の定冠詞 the は「円安」が既成事実であることを示している。これ以外に、不定冠詞は「一時性」または「不確実性」を、定冠詞は「恒久性」または「半恒久性」をそれぞれ含意する。これについては、後段の(55)、(56)を参照。

第2文型を第3文型に

(34) 「彼は大笑いした。」

He laughed heartily. [第2]

→ (a) He gave a hearty laugh. [第3]

→ (b) He laughed a hearty laugh. [第3]

(a) は名詞 laugh を目的語とする通常の第3文型である。(b) は動詞 laugh を他動詞として名詞 laugh を同族目的語とする第3文型である。

(35) 「彼女の一生は最後まで充実していた。」

She lived a full life until her last days.

(36) 「少女は睡眠中もごほんごほんとかき込んでいた。」

The girl was coughing a dry raspy cough in her sleep.

同族目的語を使う文は技巧的な要素が強く、控え目に使う方が効果的である。

2重目的をとる動詞の活用

(23) で述べたように give, lend, send など2つの目的語をとる動詞は基本語に属し、英語習得の比較的早い段階でその意味と用法を知る。しかし、2つの目的語をとる動詞はかなりの数にのぼる。また、同じ語で広範囲の日本語の意味を表現できる。これらの動詞を活用できると英文を書くのに効果を発揮する。

(37) 「総理大臣は一連の失言でとうとう退陣した。」

A series of gaffes eventually cost the prime minister his job.

(38) 「交通事故で彼は右目が見えなくなった」

A traffic accident cost him the sight in the right eye.

(39) 「彼はガールフレンドに100万円の借金がある。」

He owes his girlfriend ¥1 million.

(40) 「彼にまだ礼状を出していない。」

I owe him a letter of thanks.

(41) 「君は僕の命の恩人だ。」

I owe you my life.

動詞を名詞・名詞句に

英語が日本語と比べてダイナミックである大きな理由は名詞・名詞句が文中で圧倒的な重要性をもつからである。もちろん、名詞・名詞句は主語だけでなく、目的語、補語にも用いられる。日本語では書き手と読み手、聞き手と話し手の間に了解がある限り、名詞・名詞句を主語として明示するのを避ける傾向がある。その分、動詞が文の中心的役割を果

たす。こうするほうが日本語らしくなる。したがって、英文を書くにあたっては日本語的な発想を転換して、動詞を名詞・名詞句に変えて、主語はもちろん目的語・補語としても活用する工夫が望ましい。以下、若干の例をあげる。

(42) 「アラビア語をちょっと知っているだけで彼は会社でひっぱりだこだった。」

(a) That he knew Arabic a little made him much sought after in his company.

(b) Even a little knowledge of Arabic made him much sought after in his company.

[know → knowledge]

(43) 「彼女は彼の提案はまったく知らないと言った。」

(a) She said that she knew nothing about his proposal.

(b) She denied any knowledge of his proposal.

(44) 「彼の知らないうちに契約は破棄された。」

The contract was scrapped without his knowledge.

(45) 「腹をすかしている孤児たちのことを思うと彼女は悲しくなった。」

(a) She was sad to think of the orphans going hungry.

(b) The thought of the orphans going hungry made her sad. [think → thought]

(b) She was saddened at the thought of the orphans going hungry.

(46) 「道端に捨てられたゴミの山を見ると頭にくるんだ。」

(a) I can't bear to see piles of garbage abandoned by the roadside.

(b) I can't bear the sight of piles of garbage abandoned by the roadside [see → sight]

(47) 「彼女がクラス会に来なかったので男の子たちはとてもがっかりした。」

(a) All the boys were greatly disappointed because she failed to attend the class reunion.

(b) Her failure to attend the class reunion came as a great disappointment to all the boys. [fail → failure]

動詞・副詞を形容詞・名詞に

(48) 「彼は英語がペラペラだ。」

(a) He speaks English fluently.

(b) He is a fluent speaker of English. (speak → speaker, fluently → fluent)

日本人が(48)を英訳するとき、動詞と副詞で処理する場合は圧倒的に多い。英語を母語とする人たちはこれを形容詞と名詞で表現する頻度が高い。この表現を参考にすることは日本人の書く英文に variety をもたらすために有効と思われる。

(49) 「彼はときどきタバコを吸う。」

(a) He smokes occasionally.

(b) He is an occasional smoker.

(50) 「彼女はよくこの図書館にやってくる。」

(a) She frequently visits this library.

(b) She is a frequent visitor to this library.

(51) 「僕は子供の頃、冬はよくカゼをひいた。」

As a child I caught frequent colds during the winter.

形容詞を名詞に

(52) 「日本経済の回復は首相が大胆な構造改革を実行できるかどうかにかかっている。」

(a) A recovery of the Japanese economy depends on whether the prime minister is able to effect sweeping structural reforms.

(b) A recovery of the Japanese economy depends on the prime minister's ability to effect sweeping structural reforms. (able → ability)

(53) 「われわれは日本の安全を米国に頼ることが賢明かどうか話し合った。」

(a) We discussed whether it is wise for Japan to rely on the United States for its security.

(b) We discussed the wisdom of Japan relying on the United States for its security. (wise → wisdom)

(54) 「彼は起きあがったが、すぐ暖かいベッドにもぐり込んだ。」

(a) He got up, but quickly slipped back to his warm bed.

(b) He got up, but quickly slipped back to the warmth of his bed. (warm → warmth)

「積極的な読み方」を

これまで自然な英文を書くための構文上の工夫、品詞の変換などを実例を挙げて説明してきた。もちろん、日本語と英語の表現の仕方の違いは多種多様であり、ほんの一部を瞥見したに過ぎない。しかし、英文を読むとき、単に内容を理解するだけで満足するのと、自ら英文を書くという視点をもって読むのとは、大きな差がある。後者は「積極的な読み方」と言えよう。書くことを念頭において英文を読めば常に新たな発見があり、また英語表現への感性を磨くことになろう。

例文(32)と(33)で不定冠詞と定冠詞が含意する相違について簡単に触れたが、冠詞のこのような使い方は日本人には興味ある表現である。

(55) 「靖国神社に参拝した小泉首相は真剣な面もちであった。」

A somber Prime Minister Junichiro Koizumi paid homage at the Yasukuni Shrine for war dead.

(56) 「ライオンヘヤーの小泉首相はロック歌手並みの人気だ。」

The wavy-haired Prime Minister Junichiro Koizumi enjoys rock-singer popularity.

a somber が「一時的」な表情を伝え、the wavy-haired が「半永久的」もしくは「常態」を指していることはすでに指摘した。さらに、不定冠詞は次のような表現にも用いら

れる。

(57) 「世界の人口はわずか 12 年で 50 億から 60 億に増えた。」

It took a mere 12 years for the world's population to grow from 5 billion to 6 billion.

(a mere = only)

(58) 「横綱の体重はなんと 255 キロだ。」

The grand champion weighs a hefty 255 kilograms. (a hefty = as much as)

(59) 「水銀柱は 39 度 2 分まで上昇した。」

The mercury soared to a sizzling 39.2 degrees. (a sizzling = as much as)

(60) 「彼が現れるまでさらに 30 分待たされた。」

I had to wait an extra 30 minutes before he showed up. (an extra 30 minutes = 30 minutes more)

(61) 「島民およそ 2 千人が先週島を離れ、さらに 500 人が今週離島する予定だ。」

An estimated 2,000 islanders evacuated the island last week. An additional 500 islanders are expected to follow suit this week. (an estimated = about; an additional 500 islanders = 500 more islanders)

(57) ~ (61) では a/an + 形容詞 + 複数名詞の形をとっている。これは形容詞と複数名詞を 1 つの概念と見なし、それに不定冠詞をつけたものと考えることができる。いずれも日常的に使われる表現である。

興味ある表現 (1)

「積極的な読み方」をしているとほかにも様々な興味ある表現に気づく。ほんの数例を取り上げる。

(62) 「組合は賃上げと労働条件の改善を要求している。」

(a) The union is demanding an increase in wages and an improvement in working conditions.

(b) The union is demanding increased wages and improved working conditions.

(c) The union is demanding higher wages and better working conditions.

(63) 「首相は公共事業費を削減し、社会福祉と雇用創出ための予算の増加を求めている。」

(a) The prime minister is calling for a reduction in public works spending and an increase in the budget for social welfare and job creation.

(b) The prime ministrer is calling for reduced public works spending and an increased budget for social welfare and job creation.

(c) The prime minister is calling for less money for public works and more for social welfare and job creation.

(62), (63) の (a) は名詞を用いた直訳型であり、(b) は名詞の代わりに過去分詞か

ら転化した形容詞を用いたもので、英語として自然な表現である。意味的には(c) のように more, less, higher, lower などの単純な形容詞の比較級で代用できる。英文を書くときには(a), (b), (c) をミックスすることによって変化に富んだ表現が可能になる。

興味ある表現 (2)

われわれが come, go などの動詞を見たとき、直感的に具体的な「場所」を連想する。しかし、英文では次例のように抽象性の高い名詞・名詞句をとることが多い。

(64) 「われわれは彼らを助けに行った。」

We went to their aid.

(65) 「われわれは震災の犠牲者救援に急いだ。」

We hurried to the rescue of the quake victims.

(64)、(65)では go や hurry のかわりに run, rush, speed などで動きにアクセントをつけることができるし、aid, rescue の場所には assistance, defense, help などを用いることができる。

(66) 「宇宙飛行士は地球に帰還、熱狂的な歓迎を受けた。」

The astronaut returned to earth to a hero's welcome.

次の表現になると to のあとにくる名詞は完全な抽象名詞である。

(67) 「操縦士はパラシュートで脱出して無事だった。」

The pilot bailed out (or parachuted) to safety.

(68) 「少年は海岸まで泳いで助かった。」

The boy swam ashore to safety.

(69) 「その反戦活動家は意気揚々と出所して自由の身になった。」

The antiwar activist walked triumphantly out of prison to freedom.

興味ある表現 (3)

上例(67)～(69)では to 以下は「結果」を示すと考えられる。したがって、(67)は The pilot bailed out and was safe. と書き換え可能である。次の数例も to 以下は「結果」を示すと考えられるが、用法に特異なものがある。

(70) 「少年は体育館の屋根から飛び降り自殺した。」

(a) The boy committed suicide (or killed himself) by jumping from the roof of the gymnasium.

(b) The boy jumped from the roof of the gymnasium to his death.

(b) The boy jumped to his death from the roof of the gymnasium.

もし「体育館の屋根から押されて落ちた」という他殺事件であれば、The boy was pushed from the roof of the gymnasium to his death./ The boy was pushed to his death from the roof of

the gymnasium. となる。事故死であれば The boy fell from the roof of the gymnasium to his death./ The boy fell to his death from the roof of the gymnasium. で表現できる。

(71) 「2人の少女は10階から飛び降り自殺した。」

The two girls plunged from the tenth floor to their deaths.

The two girls plunged to their deaths from the tenth floor.

この表現には2つの興味深い点がある。1つは、death に所有格がついていることである。もう1つは主語が複数の場合、death も複数形をとることである。

(72) 「未明の火事で幼い子供3人が焼死した」

Three young children were burned to death in a predawn fire.

(72)では主語が複数であるが death は単数であり、また death に所有格はついていない。(70), (71)との違いは何に由来するのであろうか。He was shot to death./ The mob stoned the beggar to death./ The rebels hacked dozens of prisoners to death. などの例から推測できるのは、shoot, stone, hack, poison などが致死的な結果をもたらすことが予想される語であり、あるいは昔から刑罰に使われてきたような語である。他方、fall, jump, plunge, push などはその動作そのものに致死性を想像させるものではなく、たまたま結果的に死を招いたと考えることが可能ではなかろうか。そのために、偶発的な死を個々の具体的なものと捉え、複数の人間がかかわる場合、その死を複数視すると推測できる。

言い換え

「興味ある表現」はほかにもいろいろ例証できるが、いつまでもこれにこだわっているわけにはいかない。それよりも日本語と英語の表現の大きな違いの1つとして「言い換え」を指摘しておかなければならない。

日本語では漢語表現が極めて重要な働きをしている。いや、漢語表現を抜きにして日本語は不可能と言っても過言ではあるまい。漢語表現は簡潔で歯切れ良く、その魅力にとらわれると抜け出せず、われわれはその中で安心しきっている。その結果、同じ漢語表現がなん度繰り返されても目障り、耳障りには感じない。

しかし、日本語を飛び出して英語で表現することになるとこの漢語依存がしばしばマイナスに作用する。英語の表現は具体性を好むし、同じ語句の繰り返しを避ける。漢語のもつ抽象性は英語で表現しにくく、また漢語に頼り切っている日本人にはそれに代わる言い換えの準備もできていない。英文を書くときはこのことを十分に留意し、できるだけ具体的に、また同じ語句の使用を避け、表現を魅力あるものにする工夫が必要だ。

卑近な例だが（もっともこれが時代の反映でもあるが）、1日としてニュースに登場しない日はない「不況」と「人員削減」をとりあげる。「不況」には「景気後退」というテクニカルな言い換えがあるが、堅苦しくまた語呂もあまりよくない。「人員削減」には「首切り」、「人減らし」などの言い換えができないこともなりが、いずれも少々「どぎつい

表現」に聞こえる。むしろ、近頃は「人員カット」「リストラ」「レイオフ」などの外来語が使われるようになってきた。いずれにしても、日本語での言い換え表現は極めて限られている。

他方、英語では言い換えの variations ははるかに多い。以下に広く用いられている言い換えを列記するが、たとえ長文であっても、これらを組み合わせることによって多様な表現が可能になり、目障り、耳障りを防ぐことができるだろう。

不況： [economic or business] recession, downturn, slowdown, slump, stagnation;
stagnant economy, sluggish economy, slump in business

人員削減：(名詞) job cut, job shedding, job trimming, job loss, job scaleback,
layoff, staff cutback (or reduction), workforce cut (or curtailment, trimming),
personnel downsizing
(動詞) cut [100] jobs, eliminate (or shed, slash, trim, get rid of) [100 jobs],
lay off [100 workers]

おわりに

以上、「英語らしい英語」を書くためにはどのような工夫をすればよいか、まず文型を中心に検討し、後半ではいくつかの具体的な例を挙げた。しかし、「日英表現の比較」のテーマからすれば、文字通り "scratched the surface" にすぎない。

日本語、英語にはそれぞれこれらの言語を使う人間の伝統的思考パターン、表現パターン、そして価値観がある。極めて異質の2つの言語の表現を接近させることは至難のわざである。しかし、国際化時代の今日、日本人は否応なしに外に向かって自己を表現し、主張せざるをえなくなっている。国際的コミュニケーションの道具として英語の圧倒的な地位を考えると、教育の現場でも「発信型」英語—残念ながら現状では written English よりも spoken English への傾斜が強すぎるが—に向かって効果的な努力をすることが緊急の課題であると考えられる。

(本稿は筆者が平成13年9月8日、大阪学院大学で開かれた西日本言語学会第31回講演・研究発表会で行った講演をまとめたものである。)